

奈良市立伏見こども園「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2023年6月24日（土）、2022年度ソニー幼児教育支援プログラム最優秀園の奈良市立伏見こども園において、「最優秀園実践発表会」を開催しました。県内だけでなく、遠方からは沖縄県からもご参加いただき、全国の認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・高校・大学の教育関係者他、約300名の参加がありました。

以下に奈良市立伏見こども園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

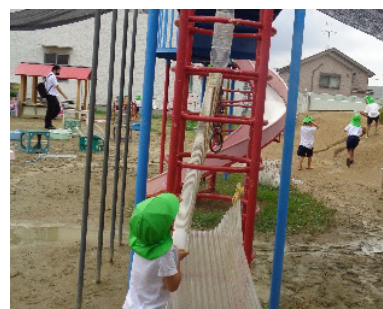
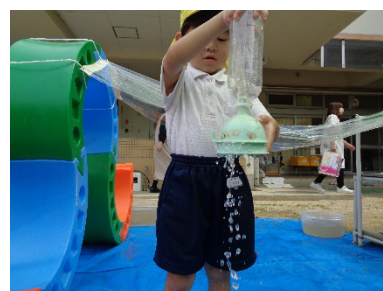
1. 日時：2023年6月24日（土）9:30～16:10
2. 主題：「探究の深化」～科学する心を育てるために～
3. プログラム
 - 1) 公開保育 9:30～11:00
 - 2) 開会式 12:30～12:40
 - 3) 実践発表・本日の保育の振り返り 12:40～13:20
 - 4) 研究協議（グループセッション）・報告 13:20～14:20
 - 5) 記念講演 14:40～16:00
演題 「探究の深化」～伏見こども園に学ぶ～
講師 学習院大学教授 秋田 喜代美 氏
 - 6) 閉会式 16:00～16:10

公開保育

3歳児・4歳児・5歳児の園児169名が、園庭にて自由遊びを展開する様子を公開した。

3歳児は、水、砂、土、泥の感触を存分に味わいながら何度も繰り返す姿が見られた。水を汲む、移し替える、流れる、溜める、飛ぶなど、水との関わりを通して心を動かし、面白さを感じて繰り返しながら、したいことに向かう姿や、ドロドロの土を触ったり握ったりして感触を楽しむ姿が見られ、「反応」「反復」等の探究の芽生えの姿があった。

4歳児は、水、土、泥、泡、草花などとの関わりの中で、自分なりにやってみたいことを試したり確かめたりする姿が見られた。その中で、様々な用具の穴に興味をもち、ホースを挿して水を流すコースをつかって遊んでいた。しかし、ホースの高低差により水が思うように流れず、溜まったり、逆流したりして思うようにならない出来事との出会いから、思い付いたことを試す姿につながり、「気づき」「試す」「確かめる」といった探究につながる模索の姿が多く見られた。



5歳児は、水、泡、ホウ砂、糠などを使って量を調節し、自身が見出した新たな硬さや質感の違いを探究しながら、本物らしいごちそうをつくったり、様々な用具の使い方を工夫して転がし遊びをしたり、手作り人形を使ってレストラン屋さんの人形劇遊びをするなど、共通の目的をもった友達と、相談しながら遊びを進める姿が見られた。その中で、園庭の中央にある伏見スライダー（木製遊具）の高低差を利用し、ものを釣り上げたり、転がしたり、水を流したりなど、それぞれ目的をもった遊び場があちこちで展開される。その一つに、滑車のような原理で紐の先にハンガーを逆さに付けて、洗濯ばさみで挟んだボールを引き上げようと試行錯誤している。また、別の場所では、バケツから波板へと流れた水を、元のバケツに戻そうと試行錯誤する姿があった。様々な用具や材料の中から遊びに必要な物を選択し、目的を達成するために粘り強く探究する姿が見られた。時には離れた倉庫から用具を運び出したり、道具を組み合わせたりなど、これまでの経験を活かして方法を考え、思考を巡らせる探究の深まりの姿がそこにあった。



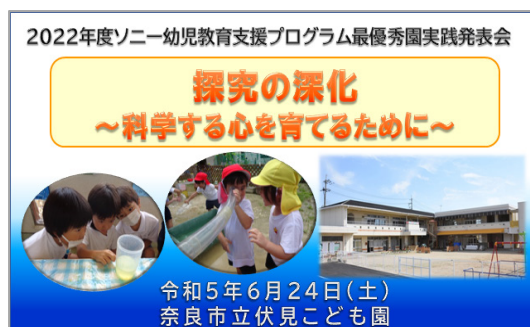
実践発表

研究テーマ：「探究の深化」～科学する心を育てるために～

＜研究発表＞

1) 実践論文について

本園は、環境と関わる中で“自ら遊びを創り出す子ども”の育成をめざし、2年間にわたり「科学する心を育てる」を主題にした研究に取り組んできた。本研究では、「探究」を深める過程を探ることで、どのように「科学する心」を育むことにつながるのかを明らかにすることができた。また、3～5歳児の実践事例から子どもの姿を読み取り、探究を深める時期を3つに分類し、「探究の深化」と捉えて分析を行った。



〔3歳児実践事例〕

3歳児は、思い思いに水を流す中で、D児とE児が長く繋いだ透明ホースの両側から水を流すことを繰り返すうちに、D児は流したいのに自分の方へ戻って来る水に思わずホースを持ち上げて流れを止めホースの先を見つめる姿があった。この思わず体が動く様子を「探究の芽生え」の“反応”の姿と読み取り、目の前のことを本能的に何とかしようとする力が培われたと捉えた。このように、3歳児は「やってみたい」と思ったことを思う存分行い、心が動くと思わず体が動いて、面白さや不思議さに心を動かして遊ぶ中で、思わずホースを持ち上げるといった感覚的理解を広げていく「探究の芽生え」の姿が特徴として表れていた。また、探究の芽生えを育むために「心を動かす瞬間」が大切であることが分かった。



[4 歳児実践事例]

4 歳児は、K 児が築山の上から水を流して遊び始め、ピチャピチャと水が跳ねる音に気付いて心を動かし、水量を増やして何度も試すうちに、トンネル内で響く音の違いに気付いた。ここでは、思い付きを試してカテゴライズしながら理解に繋げ、音を聞き分ける力、別の場所でも同様に確かめる力などが培われていると捉えた。このように、4 歳児では偶然起こった驚きや不思議さに心を動かして、思い付きを試したり曖昧なことを何度も確かめたりして理解に繋げていく「探究につながる模索」の姿が特徴としてよく表れていた。また、模索の時期を十分に積み重ねることで、理解につなげたり経験を広げたりしていくようになることが分かった。



[5 歳児実践事例]

5 歳児は、4 歳児の頃の経験を活かして、板の上に物を乗せて飛ばす遊びが始まった。カラーボールが転がって落ちないように板の淵に壁をつくったり、ふり幅が大きくなるように高さを出して反動をつけたりして遠くへ飛ばそうとするなど、同じ模索の時期でも 5 歳児は、これまでの経験から予想して思い付いたことを試そうとする特徴が見えてきた。



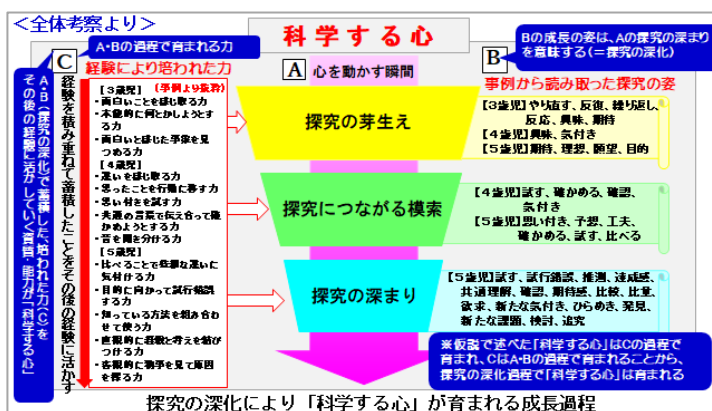
予想を上回る出来事やつまずきにも心を動かし、知っていることを方法に取り入れながら使えそうなものを選択する力や直観的に経験と考えを結び付ける力などが培われた。この模索の時期を通して様々な事象と出会い経験の幅を広げて理解を深めることに繋がっていることが分かった。量りで図ったり記したりして重さと飛ぶ長さを考える姿が見られ、試行錯誤を繰り返すことで、同じくらいの重さでも物の形によって飛ぶものと飛ばないものがあることや、よく飛ぶには重さだけが要因ではないことにも気付いた。

遊びの後の話し合いで映像を観てみると、飛ばし方や力加減などの違いから飛ぶ距離が変わることにも気づき、一番よく飛ぶ方法を「追究」する探究を深める姿が見られた。このことから、5 歳児にはカテゴライズ力が身に付いてきて、これまでの経験を活かして新たな事を見出し、理解を深めていく探究の深まりの姿が特徴として表れている。探究を深めていく中で、比較して詳しく調べる力や客観的に物事を見て原因を探る力などが培われ「もっと深く知りたい」という目的意識の高まりが「探究の深まり」に繋がるということが分かった。

[ま と め]

事例を分析することで、仮説に挙げた 3 つの時期の深まりによって育まれる「探究の深化」過程を明らかにすることができた。各年齢の探究の姿から、経験を積み重ねることで思考の広がりが見られる成長の姿は探究の深まりを意味し、カテゴライズ力が身に付いてくると探究の芽生えから探究の深まりへと段階を飛ばして経験を活かす姿も見られ、「探究の深化」は加速するということが分かった。

実践論文の分析により、「科学する心」は、探究の深化過程で経験を積み重ねて蓄積した力、いわゆる「学び」をその後に活かしていく資質・能力であると結論付けた研究実践を報告。



2) 昨年度の2学期以降の遊びの様子について

3歳児では、テープの巻き芯やプリンカップなどの空き容器を転がして遊ぶ中で、様々な不思議さに目を向けて繰り返し遊ぶことで理解につながった「探究につながる模索」の姿が見られるようになってきた実践について報告。

4歳児では、ポーチュラカのどこがネバネバしてるのか不思議に思い、花、茎、葉っぱに分けて、切ったり、すり潰したりして確かめる「探究につながる模索」の姿が見られ、もっと知りたいと思う力や、どの部分でも同様に確かめる力が培われた実践について報告。

5歳児では、伏見スライダーに紐をくくって高低差をつけ、上から下に物が動くことに面白さを感じて、ロープウェイ遊びへと発展し、「自動で動かしたい」と新たな目的に向かってこれまでの経験を活かしたり、新たな発見を得たりしながら理解を深め、試行錯誤する「探究の深まり」の姿を捉えた実践について報告。

3) 今年度の1学期の遊びの様子について

3歳児では、4月下旬、砂の感触や移し替えを楽しむ中で、目に付いた筒を使ってバケツに砂を入れると、「ミキサー車みたい！」と心を動かし、ミキサー車のドラムに見立てて興味をもって遊び出した姿を探究の芽生えと捉えた実践について報告。

4歳児では、5月中旬、風呂の椅子の穴に興味をもち、ジョウゴやホースの先を挿して水を流してみるのが、高低差で水が止まってなかなか流れないという思うようにいかない出来事に心を動かし、「ホースの先まで水を届かしたい」と目的が生まれ、試したり確かめたりする模索の姿を捉えた実践について報告。

5歳児では、長い2本の棒を使ってコースをつくり、転がすものに合わせて棒の幅を替えるなど、毎日コースの形を変えて遊ぶ中で、試したり、新たな気づきを得たりして経験を積み重ねながらその後に活かす姿が見られ、経験を通して、知っている方法を組み合わせて使う力や、目的に向かって試行錯誤する力などが培われた探究を深める姿を捉えた実践について報告。

4) 本日の保育の振り返りについて

〔3歳児〕A児が透明ホースに興味をもち、ホースを使って足元のミニプールの水を汲む。持ち上げてホースを傾けると、出てくると思って見ていたホースの先の反対側から水が流れ出た。隣で遊んでいたB児がA児のホースから出てくる水に心を動かし、持っていたホースで思わず水を受け止める「反応」の姿を探究の芽生えと捉えた。今度は一緒にホースで水を汲んで遊びだし、何度も繰り返すことで、ホースを傾けた方に水が流れるということを実感的に理解し、互いにホースを持って流したり、相手のホースの水を自分のホースで受けたりして何度も繰り返す姿が見られるようになった。水と関わって思う存分遊ぶ中で、水の動きに心を動かし、面白いと感じた事を何度も繰り返し遊ぶ姿につながった。この心を動かす瞬間と出会い、したいことに向かう姿が科学する心を育むことにつながると考える。



〔4歳児〕ホースやプラスチック製の網、風呂の椅子などの穴に興味をもち、ジョウゴやホースを穴に挿して遊ぶ姿が見られた。その中で、いつもは違う遊びをしていたC児が円柱に丸めたプラスチック

製の網に興味をもち、穴にホースを挿してグネグネコースをつくりはじめた。グネグネコースに水を流してみると、ホースや水の重みで立つと思っていた網が急に倒れたことに驚く。別の遊び場ではカラーBOXの穴に挿して倒れないように工夫する姿が見られるが、C児は洗濯ばさみを持って来て、円柱にした網を3つ揃えて立て、上端を洗濯バサミで留めて連結させ、網を支えあわせて固定してみると倒れにくい丈夫なコースができたことに心が動く。そこにホースを挿して何度も水を流し、高低差によってホースのたるんでいる部分に水が溜まったり、水が押し出されてホースの出口から出てきたり、水が逆流したりすることに驚き、さらに心を動かした。水が逆流する面白さや不思議さを感じながら、水が流れるようにホースを持ち上げたり、ホースの先に付けたジョウゴを叩いたり揺らしたりして試し、どうすれば水が流れやすくなるのかを考えながら水の動きを確かめる模索の姿が見られた。この経験から、思い付きを試す力や実際に確かめる力が培われ、心を動かしながら自ら環境に関わり、試したり確かめたりして理解に繋げる姿が科学する心を育むことにつながっていると考える。



〔5歳児〕伏見スライダーの高低差を利用して、様々な用具を使って水を流して遊ぶ中で、流れた水をバケツに戻したいという目的に向かって友達と考えを出し合って試行錯誤する姿が見られた。水を流すために波板とホースをどのように繋ぐか昨日の話し合いから、今日は早速カナビラと洗濯ばさみを使って流れ方を予想して試し始めた。しかし、波板とホースは繋がったが、水を流すと隙間から漏れてしまいホースに水が入っていないことに気づき、新たな課題に気付く。そこで、ゴムロープを括る、引っ掛けるなど使い方を考えて繋げようと、用具の使い方を試行錯誤する姿を探究の深まりと捉えた。ゴムロープは、思うように引っ掛からずラップ芯を繋げてみようとしたり、洗濯ばさみで違う止め方を試したりして、自分達の思いを実現しようとする姿があった。遊びの話し合いでは、今までの経験からラップ芯は水に濡れてしまうので、ラップを巻いてはどうか、以前、転がし遊びで波板の凹凸を活用することで、転がしたい場所に転がったという経験から波板の凹凸を活用してみるのはいかがでしょうか、これまでの経験から予測をした考えが出てきた。このように、自分たちの思いを実現するために、新たな方法を考えたり、これまでの経験を活かしたりして、試行錯誤する探究の深まりの姿が見られ、目的に向かって試行錯誤する力や経験と考えを結びつける力が培われたことで、科学する心を育むことにつながったと考える。



研究協議（グループセッション）・報告

1) 協議の視点

研究主題：「探究の深化」～科学する心を育てるために～

視点① 探究につながる子どもの姿

視点② 探究につながる保育者の援助と環境構成

視点③ 科学する心を育てるために

以上の3つの視点に沿って、16グループに分かれ、付箋に記入しながらテーマに迫る話し合いが進められた。協議の進行統括は、奈良市が各園に配置している幼児教育アドバイザー（副園長）が行った。



2) 協議内容・グループ報告

伏見小学校体育館をお借りし、広い会場で300名以上の参加者が16グループに分かれ、午前の公開保育を参観した子どもの姿の読み取りやご意見ご感想をたくさんいただいた。協議時間は約1時間と、たっぷり時間を取ったことで議論を深めることができた。

たくさんのご意見やご感想をありがとうございました。一部ご紹介いたします。

- 3歳児は、保育者との関係があり安心して自分のしたい遊びを様々な感覚（五感）を通してのびのびと遊べる環境があった。透明の素材がたくさんあり、上から見たり下から見たりと心を動かす環境がたくさん散りばめられていた。
- 子どもたちのすることを受け入れ見守ったり一緒に考えたりする保育者の姿は、子どもが主体的に遊びに向き合う姿につながっている。
- 振り返りの場面では、子どもの思いを大事にして保育者が話を進めていくのではなく、子どもたち同士で考えを出し、面白さや問題点から「次はこうしたい」明日にまたやってみたいという思いに繋がっている。
- 保育者も子どもと一緒に遊びを楽しむ。試す時間・場・多くの素材・ワクワクする用具等子ども達の3年間の積み重ねが見られた。

記念講演 「探究の深化」～伏見こども園に学ぶ～

講師 秋田 喜代美 氏 / 学習院大学教授

『「探究の深化」～伏見こども園に学ぶ～』を演題にご講演いただきました。まず、保育実践論文について、審査の観点などご説明くださいました。そして、本園の実践発表や実践から、「探究の深化」について問うた特徴や大切さについて具体例を挙げてきめ細やかにご指導くださいました。また、子どもの心の動きを捉えて行う保育者の援助や環境構成の工夫、探究過程の捉え方などについてもお話しいただき、保育者自身も探究していくこと、問うことを止めないことの重要性について、秋田先生のご講演からたくさん学び、深い理解につながりました。



1) テーマ「探究の深化」について

主体的・対話的な深い学びは、自分で体験して気づき、問うのを止めないことがまさに探究といえる。論文では、「科学する心」を自分たちの表現で幼児期の特性を的確に捉えている。

探究の芽生えや深まりという言葉があるが、それで良しにせず、「探究につながる模索」という自分達の言葉で言語化している。一人一人の子どもの心の中でどのように心が動いているのかを分析し、丁寧に読み取っている。また、事例の右側に子どもの姿を分析したことを上げており、「探究」を探究している伏見こども園の特徴が表れている。園のみんなで語り合いながら、自分たちが大事にしたい「心の動き」を言葉にし、見方を共有していくことで理解を深めている。

2) 子どもが探究する過程の捉え方

実践論文「表7」では、目的意識が高まることで探究が深まっていくなど、子どもの事実から探究を見取っている。先生たちが写真で記録をとり、園のみんなで事例を見合いながら解釈し、何度も見直して読み解く。こうして園の職員間で共有し、対話しながら育ちを見取っていくからこそ気付ける探究過程が見られる。一人や特定の年齢だけでは見えない、様々な年齢の違いがあるからこそ保育者も探究している。そこが伏見こども園の探究の深化を支えている、先生方の探究の深化。



3) 保育者の援助と環境構成

論文の事例からも、3，4歳児では、あらかじめ前日の子どもの姿から予測して準備しておいたり、子どもの遊びの姿から再構成したりしていることが書かれているが、「思いっきり水を流して音を確かめられるようにした」など、思い切り試せるようにさりげなく先生たちが水を補充するといった保育者の役割が今日の保育からもうかがえた。子どもへの直接的な援助だけでなく、間接的に援助することで子どもがもっと追究できるようにといった援助や環境構成をされていた。

4) ものの探究が生むダイナミズム

実践報告のスライドでも紹介されていた子どもたちの「匠の技」とありましたが、倉庫から取り出せる様々なもの、カナビラや結束バンドなど本物の工具に、子どもが魅力を感じている。冊子7ページの事例より、さら砂の作り方にこだわっている姿はまさに匠ですね。また、サラ砂の粒を顕微鏡で拡大して状態を確かめる使い方。デジタルで想像し易くし、目では見えないものを確認する使い方は、ギガスクール小学校以上とは違う活用の仕方。乳幼児期だからこそこういう使い方をして確かになりたいということを、この園は論文で表している。

5) 保育者の探究プロセス

伏見こども園の取組より、カンファレンスを継続してきたとある。昨年度から「科学する心」をテーマにして読み取りをし、前年度の論文の講評を基にして翌年度の論文の方向性を決め、振り返りの日を「ソニーの日」と呼んで計画をするようになった。これまでの研究から「科学する心」といった新たな着眼点から見えていき、「ソニーの日」という実践を入れるなど、伏見こども園がワクワクしながら楽しんでやっていることがよく分かる。こうした園の文化や探究文化が、子どもたちの中にも、保育者の中にも出ている。

6) 園文化の持続可能性

子どもたちが見出した「匠の技」という表現がとても素敵だと思います。「匠の技」という言葉を、子どもの遊びの中に見るという子ども観自体が、子どもを「すごいなあ」と、リスペクトしているわけで、これが保育の面白みとか楽しみを分かち合っている一体感やまなざしが園の文化であり、みんなで共有していることが、園の探究を持続可能にしていく。価値の根底にどういう子ども観をもつのか、保育というものの面白みをどう追究するのかということが大事なのではないかと思います。

7) さらに今後への問い

今日のようなネットワーク、「科学する心」のこういう公開保育が刺激となって、みんなでつながり合って連動していくことで、互いに自園のマネジメントをしていくことが大事となる。

最後に「科学する心」という一つの窓口から探究し、コミュニティーをつくっていただけたらと思いますと、参加者のみなさんにメッセージとエールのお言葉をいただきました。

* * * * *

このような機会を提供していただき、温かいご支援ご指導を賜りました秋田喜代美先生をはじめ、ソニー教育財団の皆様、関係者の皆様、そして、たくさんの参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。

— 奈良市立伏見こども園 職員一同 —

